

大学サッカーの選手に適したコーチ像の研究 -選手の求めるコーチ像を基に-

山口一樹 (競技スポーツ学科 コーチングコース)
指導教員 山田 庸

キーワード：情熱， 到達度， コーチング

1. 緒言

大学サッカーは成年にあたる1種に分類されるが，社会人ではなく学生であるという特別なカテゴリーである。現代の大学生の特徴について，溝上（2004）は，「自己責任である世の中において自己決定できない者，自ら動けない者が存在し，その者たちが課題やモデルを欲しがっている」と述べている。そのような学生に対する指導には18歳までのカテゴリーや社会人とも違った指導方法が求められるのではないか。そこで本研究では，大学のサッカー部に所属する選手を対象に，大学サッカー選手の実態を明らかにし彼らの求めるコーチ像と適したコーチングを導き出すことを目的とした。

2. 研究方法

関西学生サッカーリーグ1部に所属するB大学男子サッカー部員1回生から3回生の調査協力を承諾を得た146名を調査対象とし5件法による16項目からなる構造化アンケートを実施した。①プロ志望の学生とプロ志望ではない学生について，②コーチに情熱を求める学生について，③コーチに冷静に観察し見守って欲しいと思う学生について，の3要因について調査した。

3. 結果および考察

プロ志望の学生は大学に入ってから自己変化を感じている傾向にあり，コーチに情熱と戦術を立てることを求めている傾向にあった。

コーチに情熱を求める学生はゲーム体力の到達度において高い傾向にあり，コーチ

に冷静に観察すること，戦術を立てること，規則を作ること，規律指導をすることを求める傾向にあった。

コーチに冷静に観察してほしいと思う学生は，サッカー理解，コミュニケーション能力の到達度が高い傾向にあり，コーチに情熱と規律指導を求める傾向にあった。大学からの自己変化を感じた学生，又サッカースキルの到達度が高い学生はコーチに対して，コーチは学生を冷静に観察したうえで，学生に刺激を与えるコーチングを行い，学生を改善することを求めていると考えられる。

大学サッカーの選手は，大学サッカーのコーチに対して自分の足りないところを改善してくれることを望んでいる選手は少ない。選手はできていると感じる点について，向上心がうまれ，コーチに対してより積極的にコーチングを求めると考えられる。

表1 プロ志望群とプロ志望以外群における各項目の基本統計量 (N=146)

No.	質問領域	質問項目	プロ志望 (N=46)		プロ志望以外 (N=100)		有意差	
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1	自己変化	オンザピッチ	3.57	0.98	3.27	0.92	p<.10	
2		オフザピッチ	3.50	1.09	3.11	1.09	p<.05	
3	到達度	テクニク	2.28	0.98	2.01	0.85	ns	
4		プレーの判断	2.28	1.05	2.15	0.81	ns	
5		フジリティ	2.35	1.16	2.07	0.77	ns	
6		ゲーム体力	2.35	1.16	2.27	0.92	ns	
7		サッカー理解	2.50	0.89	2.55	0.78	ns	
8		リーダーシップ	2.26	0.83	2.13	0.79	ns	
9		メンタリティ	2.89	0.99	2.75	0.86	ns	
10		コミュニケーション能力	2.87	1.05	2.82	0.78	ns	
11		コーチについて	熱い情熱をもってコーチに接してほしい	3.48	1.01	2.88	0.92	p<.05
12			冷静に観察してほしい	3.09	1.03	2.99	0.81	ns
13	戦術をコーチが立てたほうが良い		2.91	1.15	2.57	0.90	p<.10	
14	捕り手をコーチが作る		2.24	0.87	2.16	0.77	ns	
15	観戦ルールを学生が作る		3.41	0.93	3.36	0.87	ns	
16	コーチが規律指導		2.87	0.96	2.63	0.95	ns	

引用・参考文献

溝上慎一（2004）ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる。日本放送出版協会：東京，pp162-207。